

スウェーデンの金融政策とFOMC

スウェーデンの中央銀行(リスクバンク)が政策金利を0.25%上げた。4ヶ月間で3度目だ。これで政策金利(レポレート)は1%になった。だがクローナは下落した。典型的な buy the rumor, sell the fact のためだが、中央銀行が中期的な引き締めの可能性を否定したことにもよる。通貨戦争の中で利上げによるクローナのさらなる上昇が景気回復に水を差すことを牽制するためだ。

スウェーデンクローナと言えば、欧州の円と言われたことがあった。スウェーデンも日本と同様、世界経済の成長の恩恵を受けやすい成長通貨とみなされていたからだ。だが今では様相は一変して、一方は既に出口戦略を実行しているが、日本は新たな金融緩和策を模索している。

スウェーデンの金融政策ではインフレ目標を93年から採用しているが、30年代には物価水準目標を採用してデフレを克服した。これは物価水準を一定に保つことを目標に金融政策を運営するものだ。そのため当時国内物価が安定していた英国ポンドに為替レートをペッグさせた。

来月予定されているFOMCは市場で最も注目されるイベントだが、今のところ一層の量的緩和策が期待されているが、そうした中で物価水準目標も選択の一つとして検討される可能性もある。

バーナンキは学者として当然こうしたスウェーデンの事例の研究もしていて、多くの非伝統的な政策は現在のFRBにとって全ての政策オプションになるはずだ。包括緩和策を打ち出した日銀は28日に政策決定会合を行うが、ここはFOMC待ちになる。

FOMCの結果次第では日銀はさらに動かなければならない雰囲気もあり、市場はもちろんのこと世界中の中央銀行も気が気ではないだろう。リスクバンクがさらなる利上げの可能性を否定したのもFOMCを睨んでのことだ。